

# 小松

巻頭  
インタビュー

# 理

地域活動家  
ライター

# 虔

復興は「今を生きる人間」を  
中心にしすぎている

聞き手 ● 渡邊直樹 本誌編集長 写真 ● 森枝卓士

小松理虔さんは、初の単著『新復興論』で

第18回大佛次郎論壇賞を受賞した。

被災地でもある地元の福島県いわき市を歩き、

話を聞き、歴史を学び、アートプロジェクトと

関わる中で見えてきた、

「復興」にとって大切なこととは何か？

## Komatsu Riken

1979年、福島県いわき市小名浜生まれ。  
法政大学文学部卒業後、福島テレビ入社。

2007年、中国・上海で日本語教師を務めたのち、日本人向け情報誌を編集。

2009年帰郷。地元でサラリーマンをしながら地域活動を始める。

2015年以降フリーランスに。

2019年、『新復興論』で第18回大佛次郎論壇賞受賞。

いわき市小名浜南部の高台から小名浜臨海工業地帯を臨む。工場地帯の先は、水族館や物産館のある小名浜港エリアだ。





今は仕事場としている「UDOC.」で。壁画は共同主宰者だった友人の丹洋祐さんが描いた。

小松さんは大学卒業後、地元の福島テレビに入社し社会部に所属。3年後に中国、上海で1年間日本語の先生、その後、日本語の情報誌のライターや編集の仕事をして、2009年の秋に帰国。地元小名浜の材木屋に就職。サラリーマンをしながら、地域で町づくりの活動として、小さなイベントを企画したり、情報発信する媒体を制作していた。

**震災を契機に、意識も変わり見え方が変わっていった**

**渡邊** 2011年3月11日の東日本大震災のときは小名浜にいたんですね。

**小松** はい。2009年に上海からいわきに帰ってきたときから、ウェブマガジンとリアルな場所の運営をしたいと思っていました。オルタナティブスペース「UDOK.」の構想を固めていて、3月12日に契約する物件を見つけていたんですよ。これで自分たちの居場所ができると思っていたら、3月11日に震災です。それでも、やりたいことは変わらなかったもので、小名浜町内の別のテナントを借り、2011年の5月から「UDOK.」を始めました。人が集まって夜な夜ないろいろな活動の場になっていました。今は

完全に僕の仕事場として使っています。**渡邊** その頃のお仕事は？

**小松** 2012年に材木屋から蒲鉾屋に転職しました。蒲鉾屋にいと食品の風評被害の実状がよく見えてきます。それをブログで書いていたら、面白がつくれる人もいて。ちょうどYahoo!の記者登録をしていたので、そういうところで発信したりもしていました。そこから、「うみラボ」という、福島県

沖の魚の安全性を科学的に調査するという活動を仲間と始めたりしました。蒲鉾屋にいながら、いろいろなことを

やっていたのが、2012年から2015年くらいまで。2015年にフリ



小松さんが編集に関わった雑誌や書籍。地域包括ケアマガジン「igoku」(発行:いわき市)は2019年度グッドデザイン賞金賞を受賞。『福島美少女図鑑』0号の表紙はモデルの少女の希望で火力発電所の前で撮影。